



今年の教区の目標
 黙想の家・若者たちを
 教会の宝に

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
 カトリック那覇教区本部
 TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
 発行人 押川 壽夫司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2017年1月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第698号 (1月号)

HAPPY NEW YEAR!

謹賀新年

あけましておめでとうございます。

教区の皆様、恩人・友人、教区出身者また那覇教区報「南の光明」の読者の皆様に年の始まりにあたり、いづくしみ深い神の祝福と平和を今年の日々のミサでお祈り申し上げます。



那覇教区長

ベラルド 押川 壽夫 司教

二〇一七年 元旦



★信仰の歩み

イエスは神でありながら、わたしたちと共に歩むために、自らへり下り人間となられました。この神秘をわたしたちは、数日前に救い主のご降誕・クリスマスとして祝いました。教会はクリスマスの喜びと平和を受けて新年を迎え、新たな心で信仰の歩みを始めます。

今年はまだ日本の教会にとってめでたい年です。永年待たれたユスト・高山右近の列福式が来たる二月七日に大阪大司教区で執り行われます。四百年の時を越え、今に信仰の証し人としてわたしたちに勇氣と希望を与え続けているキリシタン大名の列福は日本の教会にとり大きな喜びです。

信仰の自由に恵まれた現代のわたしたちは、世の富や名誉、権力よりも神への愛と信仰を命にかえて大

切にした右近の人生に学び信仰の歩みを、また新たにしたいと思えます。福者となる右近は、神と共に歩む豊かな靈性を通して自分を取り巻く多くの人に神の愛を証しました。彼は迫害に耐え、祖国を追われても信仰を貫き、神の祝福、賛美と感謝、祈り、平和と喜びに満たされて異国の地でその生涯を閉じました。

高山右近の取り次ぎを祈りながら、わたたくしたちも信仰の歩みを、また新たに踏み出しましょう。

★教区目標

教皇フランシスコは次回のシノドス(世界代表司教会議)のテーマに「若者」を選ばれました。教会の未来、若者たちに光を当てて、わたたくしたちも今年の教区目標に「黙想の家・若者たちを教会の宝に」を掲げます。若者は常に社会でも教会でも希望のし

るし、活力の源であり、また、子ども・若者なしには教会の未来はありません。ないからです。

今年、那覇教区サマーキャンプが子や孫に受け継がれて五十周年を迎えます。これを機に、子どもたちの信仰のふるさと・ミッションビーチと黙想の家に注目してもらいます。黙想の家はビーチの潮風を受け、また五十年の風雨に耐えて今や老朽化がひどく危険を伴う状態で、早急な改修を要します。

わたしたち・教会は若者とともに歩むとき、八十歳、九十歳でも、いつも若々しい心で信仰を生きていくことができますし、また聖霊の息吹を受けて常に力強く生きるべきです。

教区の若者の皆さん、教会は皆さんから希望と喜びと力をもらいます。日本を訪れた教皇ヨハネ・パウロ二世の皆さんへの言葉を思い起こしてください。「神の助けのもとに、未来は皆さんの手の中にあるのです。未来は、皆さんのものです」(日本の若者たちへの言葉)。

教区の皆さん、サマーキャンプ五十周年記念事業の一環として、教区は今年黙想の家の改修工事を行いますので、惜しみないご協力をお願い申し上げます。

新たな年の始まりに、皆様の信仰の歩みを教会の母・聖マリアのご保護に委ねて、豊かな祝福をお祈り申し上げます。

あらためて謹賀新年
 Happy new year!

Let us begin with newness !!!

By: Bishop Berard T. Oshikawa, OFM Conv.

Jesus though he is God became man to live amongst us. This was what we have celebrated some days ago, the birth of our saviour, the celebration of Christmas. The Church receives the joy and peace as it welcomes the New Year. Let us begin with a new heart of faith.

On February 7, 2017 at Osaka diocese the long awaited beatification of Takayama Ukon a Christian warlord who was ousted from Japan in the early 17th century, he was born in 1552 was baptized at the age of 12. Following the Tokugawa feudal government's ban on Christianity, he was exiled to Manila in 1614 and died of disease the following year. The approval of Takayama as beatus, or blessed, the stage below a saint, followed the a campaign by Catholics in Japan for even if 400 years ago have passed the way he lived serves as a light that still shines on the people of the present time. This beatification gives the Japanese Church a great joy.

This modern era we are enjoying the free practice of faith/religion. It is not honor or power but loving God and having faith that we can learn from Takayama Ukons' faith life which I think we can learn something new. Takayama Ukon who will soon be beatified as "blessed" with the grace of God and his spirituality gave witnessed to a lot of people about Gods love through his life. He endured the persecution even left his motherland to give value to his faith. He passed away in a foreign land with Gods' blessing, praising, thanking, praying, having peace and abundant joy. Through the intercession of Takayama Ukon let us also renew our faith life and live with the example he have walked.

This year our diocesan aim is in correlation with the declaration of His Holiness Pope Francis that the next synod of bishops will focus on the "Young people, faith and vocational discernment". The church and even the society hope are the young people. The Church gives emphasis on the young people for without them the church future is at stake. This year, the diocese of Naha Summer camp is celebrating its 50th anniversary. The event is dedicated for the catechesis and camaraderie of our younger generation within the diocese. The building where it is held every year, together with the first attendees of this camp have grown in age. The mission beach where it stands is a home for every campers who have attended the diocesan summer camp. It is where they felt they are not few, but there are others like them with the same faith from different parishes. It is where our children find friends they can call with the same belief as they are brought to by their parents. The retreat house is a symbol of faith for our children and young people that look forward of the yearly camp. But the structure needs some repairs due to its present condition. Together as one family in this diocese let us help in the big projects that are coming concerning the retreat house "moku sou no ie" fund raising activities. It is not only the concern of the Young people but even us, we maybe 80, 90 years old we all hope for our young people to continue the faith and pass it from generation to generation.

Let us start renewing our faith and helping the faith to be passed from generation to generation. Happy New Year !!!



SLRC Migrants Office Island Activity



Christmas with the Miyako Community



Baptism of Mathew Chinen at Ie Island



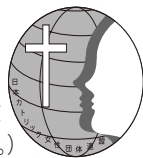
教区女性の会 新年会のお知らせ

日 時: 2017年1月21日(土)

- ・ 代議員会 午後1時
- ・ 講話 午後2時 講師 押川壽夫司教
- ・ 懇親会 午後3時 (一品持ち寄りです。)

場 所: 安里教会

2017年のスタートを有意義にするため、多くの皆さんの参加をお願いします。久しぶりの顔合わせを楽しみましょう。今年は、場所は安里教会になりました。



1月例会

那覇教区平和委員会

日 時: 1月29日(日) 午後2時~4時

場 所: 安里教会

講 師: 島袋 夏子 (琉球朝日放送記者)

テーマ: 「枯葉剤を浴びた島2」

~ドラム缶が語る終わらない戦争~

(日本民間放送連盟テレビ部門最優秀賞受賞)

問い合わせ 平和委員会 ☎090-3339-6474 (谷)



沖縄の冬は陽だまりに居るような心地よさで「ずっと今の季節だと良いネ」と友人たちと他愛のないオシャベリをしながら車で北部へ向かった。

十二月の平和学習の目的地は屋我地の愛楽園。到着して、まず、園の信徒の方たちといっしょに谷司教様司式のごミサに与った。

その後、交流会館を訪れた。そこは資料館になっていて、担当の方から、戦前戦後にわたって入園者の方たちの想像を絶する過酷な歴史があつた事の説明を受けた。不条理な国の政策によって偏見、迫害の中で暮らして行かなければなら

なかつた人たちを思うと胸が締め付けられ、今も昔も変わらない園を取りまく美しい風景が悲しく感じられた。

平和学習は一日だけの参加で帰路に就いたが、十何年前に中北部教会の新年会で、愛楽園を訪れた時のことが思い出された。名護教会、石川教会、具志川教会の三教会が、持ち回りの担当で毎年開催されている交流、親睦を中心としたこの集いは実に楽しく年が明けると皆が心待ちにしている恒例の行事である。

特に名護教会が担当で、愛楽園で開催

された時は参加者も多く、抽選会あり、踊りあり、歌サンシン、カラオケと盛り沢山のプログラムでにぎわった。

楽しい時間はあつたという間に過ぎ、そろそろお別れという時、「同じ姓です」と自己紹介して下さった方が「いつも燃えていなさい」と力強い言葉をくださった。ドーンと胸に響くこのことばの重みに圧倒され、その一瞬の時間が深く心に刻まれた。信仰に生き希望を失わず心を燃やして生きる人は、どんな環境、どんな



具志川教会 高江洲政子

な試練の中にあつても真つ直ぐな視線を持つてすべてを受け止め、出会

う人の心に灯を点す、その柔らかな表情を美しいと感じた。もう一人の

方は、新婚二年で発病、昭和十七年に奥さんに伴われ入園、「二、三年で治りますよ」といわれたが、その後、戦時中での栄養失調や重労働が原因で失明、生涯にわたって園を出る事はかなわなかった。しかし彼は長い人生でしっかりと足跡を残した。

カトリックの信者であつた先輩の天久さんとの三味線の出会いから始まり、月一回来て下さるアーミン神父様、有馬伝道師のミサに参加。「口では言いあらわせない程の安らぎを覚えた」と公教要理

の勉強を始め愛楽園最初の受洗者となつた。

三味線では師範の免許を取り弟子に教えるまでになった。他にも、原田道雄のペンネームで詠んだ短歌を歌集「海鳴」として七十七歳で出版。

新妻に隠さず病打ち明けしせせらぎの清き流れのほとり初期の歌から信仰生活を詠んだ。

一人来て祭壇に灯すローソクの光が見えぬ目に灯る社会にも目を向けた。

主席室に居座り陳情つづけ居る土地奪われし伊江島の人ら

と広い視野で真実を見続け人生の折々を詠み続けてきた。

言葉では言い表せない試練を神への信頼と忍耐をもつて乗り越えて来た園の皆さんの穏やかな笑顔が、いつくしみのイエスのまなざしに重なつたように思われた。

「そればかりではなく、艱難さえも喜んでいきます。それは、艱難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出すと知って練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」(ロマ5・三〇四)。

平和学習の愛楽園訪問で、記憶の中の素晴らしい信仰の先輩方と出会い、学び、感動した事を新しい年の希望に繋げて行きたいと願っています。

おめでとうございます

洗礼 名護教会

マテオ 知念 蓮大
アシジのフランシスコ 宮城 清次

初聖体 名護教会

フランシスコ・ザビエル 與那嶺幸太

『レクイエム』を祈り歌う集い

広島より中井郁夫先生をお迎えし、レクイエムを学びミサの流れに沿って、祈り歌います。

日時：2017年1月31日(火曜日)午後2時～4時
場所：カトリック泡瀬教会

■中井郁夫プロフィール
エリザベト音大宗教音楽学卒、エリザベト音大オルガン構造学担当、カトリック金剛教会、宇部教会にてグレゴリオ聖歌指導、日本グレゴリオ聖歌学会会員



神の恵みが
私たちのうえに

セナドール・ルマンガス神父
読谷教会 主任司祭

席卷しました。しかし喜びの準備や騒々しい祝いは、すぐに過去のものとなり、多忙な日常生活が戻ってきました。心温まる親族会やプレゼント交換も過ぎ去り、愛する人を失い、輝かしい想い出も消えうせ、所有していた財産もなく、心が張り裂けんばかりの現実に取って代



て新年は特別な形で始まります。私たちの母である聖マリヤが、厳かに、聖家族の物語を私たちに話してくださるのです。私たちは、神の恵みによって選ばれ、神の家族として新しい年を始めるように招かれ、歓迎されており、神の恵みを否定する必要はありません。

が夢で告げたメッセージの他に何も信じる拠り所がなくなったことは、彼らにとって大きな試みであったことでしょう。人生のあらゆる起伏において、聖家族は試されました。聖マリヤと聖ヨゼフには、神へ「はい」と応えることが、どれほどの犠牲を伴うものであるのか、完全には理解できていなかったことでしょう。神の手を取るのを止め、撒かなかったところから刈り取るのを止めることの方が容易かったことでしょう。

決してクリスマス贈り物の本当の意味を見失いませぬでした。神ご自身が彼らと共におられたのです。

神がその弟子となるよう呼び出し、彼らがそれに応えたまましくその場所で、彼らは生活の環境を整え、家族の歩みを始めました。貧困の中にあっても、聖マリヤと聖ヨゼフは、寛大に家族のために人生を分かち合い、忠実に彼ら自身を捧げ、私の愛情とあわれみ深い心で、家族に尽くしました。彼らの人生は、根本的に忠実さの証しであり、無条件の愛と、神に心を開く人々に与えられる神の力の証明でした。彼らの人生は、神への忠実と感謝、神と踊り、神の神秘的なみ旨の証人としての働きでした。聖マリヤと聖ヨゼフの聖なるカップルの物語は、私たちがクリスマスチャンファミリーとなり、クリスマスチャンファミリーを築いていく上での大切な教えであり、チャレンジであり、私たちが聖なるカップルを真似て応えるよう求められているものです。

私たちは二〇一七年を迎えました。神の恵みが私たちの上に注がれるように共に願い祈りましょう。「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて、あなたに平安を賜るように」(民数記 6:24-26)。

わられました。人生の厳しい現実、神が私たちを忘れ、遠くで休んでいるようでもあり、神はおられないのではないかとさえ感じさせます。希望は失望へ、光は暗闇へ、命は死へと飲み込まれます。歓楽と踊りは、毎日の存在の単調さを悼むようでもあり、さらにいつそう悪くなるばかりです。

私たちがカトリック教徒にとつ

聖マリヤと聖ヨゼフは、私たちが二〇一七年を迎えるにあたり、私たちと同じような人生の目標を抱いていたかもしれせん。イエスの誕生を授かった喜び、羊飼いと東方の三博士の驚くべき訪問、神の約束が始まるという興奮、しかし、その後聖家族はすぐにエジプトへと逃げなければなりません。彼らの栄光はすぐに過ぎ去り、貧困と人びとの記憶からの忘却という現実だけが残りました。このことは、聖マリヤと聖ヨゼフにとつて、神は約束をお忘れになつたのかもしれないと思つたように仕向けられた重大な誘惑であつたに違いありません。天使

私たちが、クリスマスおよびそれが私たちにもたらす善について懐疑的であるかもしれせん。私たちが、クリスマスを祝

う特別な理由すら見出せないでいるのかもしれない。私たちは、たぶん、クリスマスが、単に私たちの空の胃を満たすための、また治らない心臓病患者に希望を与えるために話されたこじつけ話のようなものだと考えるようになってきているのではないでしょう。使用料を払うための十分なお金や、テーブルに置く食料を買うための十分なお金がどこにあるのかと探し、家族が共に暮らしていくための十分な愛情がない状況にあるのかもしれない。結局、私たちは、イエスはどこにおられるのかとか、神は私たちと共にいてはくださらないのか？と疑いを抱くようになってきているのかもしれない。

しかしながら、それでも私たちは、自分の人生の全盛期にしようが、または最も脆弱な時期にしようが、私たち自身の計画を破棄して、神の計画が現われるようにすることができません。私たちは、親しみのある環境であれ、知らない土地であれ、居心地の悪い環境にあっても、救い主の誕生をもたらすことができるのです。そうして、イエスのあわれみがすべての人に感じられるようになることでしょ

う。私たちは、無私の愛における家族として形成され、祝祭の機会にあっても、十字架の足元にあっても、私たちはイエスの弟子として自分自身を示すことができるのです。私たちは、さらに大きなことも果たし得ることでしよう。なぜなら私たちは、聖マリアと聖ヨゼフが、どのような信頼と忠実、および寛大な心を持って生活したか、神により継続的に形造られ、刷新されていったかを見ることができからです。私たちは、神の招きを受け入れて勇気をいただきま

すし、神の手を取って踊ることさえもできるのです。なぜなら私たちは、聖マリアと聖ヨゼフの人生において語られた神の言葉が何であれ、神は決して偽りの言葉を口にしなかったことを知っているからです。私たちは勇敢に、傷ついた自分自身のまま教会へと赴くことができます。なぜなら私たちは、聖マリアと聖ヨゼフのうちに、神が私たちすべてを神の子どもとして集めてくださったことを知っているからです。

らされた新しい祝祭を祝うようにいたしましょう。新年を神の教会である私たちのお祝いとい

たしましょう。私たちが、教会員として新年を祝うのであれば、それは、神のあわれみと、神への従順、一致と理解、および互いの信頼によって神を証しすることに努める神の家族のお祝いとなることでしよう。

現代世界にあつては、信仰の最初の学校としての家族、およびキリスト教育の最初の場としての家族の重要性と威厳が、親として子どもたちに行使すべき義務の怠慢や物質主義による宗教への無関心によって、危険にさらされているように見受けられます。子供の最初のキリスト教育の先生であるべき両親も、何か漠然と怠慢になってしまったようです。

私たちの生活におけるキリスト教共同体の最も本質的な要素は、私たちが生を受けた家庭にあるはずで、それ故に教会は、クリスマスの時期に聖家族を祝うよう私たちを招くのです。これは、教会生活の基本的な集団としての家族の重要性と聖性を示すものです。私たちは、私たちの家庭と生活を、ナザレの聖家族を模範とするように招かれ

ています。家庭生活は、一つ屋根の下で、両親と子どもたちによって織り成されるフルタイムの仕事です。家族が愛と調和のうちに互いの心を合わせていくのです。もしすべてのクリスマスチャン家庭でこうしたことがなされるならば、そこには豊かなキリストのメッセージが見出されることでしよう。両親は、言葉と模範によって子どもたちに愛を注がず、優しさを示すこともなく、不平ばかりを口にす

るようであれば、その家庭に愛はありません。そのような家庭は、家族ではなく、単に生活の場を共有する人びとの集団でしかありません。

年齢に関係なく、家庭は、若い彼らが自分たちの困難や難題について気軽に話してできる場所であるべきです。時間は、彼らの問題を聞くだけではなく、彼らのビジョンや将来の夢を分かち合うために使われるべきです。現代社会にあつては、信仰の問題について十分に語り合う部屋すらありません。宗教は子供の最初の先生である両親とその家庭で始まり、信仰が育まれるのです。私たちは、多くの両親が子どもたちを教会へと連れ

ることの難しさを語るのを耳にしました。しかし一方で、私が出会ったたくさん両親が、その子どもたちに、無信仰の友人に影響されることを許さず、カトリック学校以外での活動を許さなかつたこと、特に日曜日のミサに必ず家族で教会に行くようにしたことで、子どもが信心深く、神を畏れるものとして成長していったことを話してくれました。私たちは思い出さなくてはなりません。イエスがこの世に來られたのは、私たちが教会のうちにあつて、神の家族となるよう、その場所を作るためであつたのです。

私たちは、成聖への長い歩みが続けています。キリスト者としての旅の他の一ページ、別の一年を歩みだそうとしていきます。私たちはよく、新年の決意を新たにしますが、重要なことはただ一つのことだけです。二〇一七年を迎えて、神が私たちと共にいてくださるといふ、強い信仰を持つように努めて参りましょう。

訂正とお詫び

先月号三ページ「ニヌファア星」日本語の本文下から6行目の「再開」は「再会」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

奉献文について 教区典礼委員 新田 選

私たちはミサに与るたびに、司祭が奉献文を唱えるのを聞いていますが、この奉献文が四つあることを知っていますか？ 司祭が唱える奉献の祈りに、心合わせて祈っているのでしょうか？ 奉献文という祈りを、初めから終わりまで唱えるのは司祭だけです。司祭は in persona Christi 即ち(キリストの名によって、キリストと共に、キリストの内に) 父なる神に向かって奉献の祈りを捧げる役目を負っています。

現在使われているミサの奉献文はすべて初代教会から受け継がれてきたものです。第一の奉献文が一番古く、シリア地方の典礼であり、特にエルサレムとダマスコの教会で使われていました。ローマの信者がそれを利用していたので、今も「Canon Romano」(ローマの奉献文)と呼ばれています。トレントの公会議(1562年)において、カトリック教会の典礼は、すべて、ラテン語で行われると決められ、更に 1570年に、教皇ピオ五世はこの奉献文(第一奉献文)を少し手直して、カトリック教会の唯一のものとなりました。そのため、第二～第四奉献文は使われなくなりました。また、信者の数が少ない時以外は、司祭は日曜日のミサを始めから終わりまで歌わなければなりませんでした。

第二奉献文はローマの聖ヒポリテウス(三世の初め)の「Traditio Apostolica」(使徒的伝統)で述べられています。第三と第四の奉献文は、五世紀の終わり頃のもので、「Constitutio Apostolica」(使徒的規則)に書き記されています。

第二バチカン公会議(1962～1965年)では、第二から第四の三つの奉献文を改めて使用できることが決められ、また、それぞれの国の言葉を使うことも許されました。

時代と場所によってミサの式次第は変わってきましたが、典礼の中で新しくなったものは三つだけです。まず聖霊の働きを願う「Epiclese」(エピクレジス)、次に「Gloria」(栄光の賛歌)、最後に「Agnus Dei」(平和の賛歌)です。

第二バチカン公会議以降、第二、第三、第四の奉献文には二つの「Epiclese」が取り入れられました。一つは聖変化の前に、聖霊によって、供え物であるパンとぶどう酒が聖とされ、キリストの御体と御血になるように願うことであり、もう一つは、聖変化のすぐ後に信徒も、聖霊の交わりの中で、聖とされ、神に捧げられたものとなり、キリストと共に一つの体、一つの心、一つの霊となるように願うことです。

「キリストによって、キリストと共に、キリストの内に…」と言う奉献文の最後の部分を信者たちが司祭と共に唱えることは許されていません。司祭がそれを歌っても、歌わなくても世界中のキリスト者はただ「アーメン」だけ答えます。しかし、日本の教会では奉献文の最後の部分が歌われる時だけ、信徒たちが「すべての誉れと栄光は、世々に至るまで」という部分を歌う許可を受けました。しかしながら、司祭がそれを唱える時には世界中の教会の信徒たちと同じように、日本の信徒も「アーメン」とだけ答えます。

奉献文は司祭がその役務として唱えることを許された祈りですが、祈りの内容に心を留め、共に心合わせて祈ることは、ミサに与る私たち一人ひとりの務めでもあります。奉献文に目を通して、その祈りを味わってみてはいかがでしょうか。



県民クリスマス

与那原教会 佐藤 芳樹

二〇一六年十二月十一日、沖縄キリスト教学院チャペルにて宗派を超えて集う一夜、県民クリスマスに参加させて頂いた。

プログラム第一部コンサート。「セラの会」カトリックシスターズ、「アンサンブルグラティア」ユーフォoniumソロ「仲地あかり」、そして、メッセージは神谷武宏師(普天間バプテスト教会牧師)。プログラム第二部 燭火祈祷。

音楽とは神から授かった調べ、あるいは、聖霊の息吹なのだろうか。カトリックシスターズの「平和の祈り」「クレドドミニ」と天使たちの歌声が、その高音と低音から紡ぎだされるハーモニーの狭間に、えも言われぬ高揚感を感じた。これを聴くだけに私は此処に来たのかもしれない。

羊飼いに託された伝言、マリアの想い(ルカ2:1520)。メサイアからのハレルヤの力強さ、アドラムステドミネと今でも、その響きが残っている。

音楽はひと時、私たちの心を止め、また、明日へと向かう糧ともなるもの。

家庭内不和から国と地域の諍いまで、繰り返される歴史に、ただ、救世主を待ちわびるだけでなく、どうか願わくば、他宗教から無宗教の人たちまで、皆が一つになるように一致をめざして、真の平和をこの手で掴み取ることができるよう願ってやまない。

最後には各々がロウソクに灯を点して閉会とされた。

教区 NEWS 教会

無原罪の聖母ミサ

泡瀬教会

毎年十二月八日がその祭日と定められた無原罪の聖母の祭日ですが、今回はグレゴリオ聖歌を歌ってお祝いしたいと、十一月十一日の午後三時から泡瀬教会において、押川司教様に主司式をお願いしてミサを捧げていただきました。

開南教会所属の前田先生の元、泡瀬教会でグレゴリオ聖歌の練習を続けているチェリス聖歌隊と、宮古島平良教会でグレゴリオ聖歌の練習を始めた有志が協力して司教様に「ミサを依頼して実現させました。」

カトリック教会の伝統の中で育まれたグレゴリオ聖歌も、歌われなくなつて久しくなります。その一方で、日本の各地で、グレゴリオ聖歌を歌ってミサが捧げられる機会も増えてきている現状もあるようです。教皇様のおられるパチカンでは、世界中からやってくる巡礼者たちが言葉の違いを越えて祈れるように、典礼においてはラテン語が今でも中心的な役割を担っていると聞いています。練習に参加する私たちの思いも様々です。ミサ曲や信仰宣言をラ

出になるのではないかと練習を始めた人もいます。

第二パチカン公會議が発表した「典礼憲章」は、第六章に教会音楽を掲げ、一六(グレゴリオ聖歌と多声音楽)の項目で、「教会は、グレゴリオ聖歌をローマ典礼に固有な歌として認める。したがってこれは、典礼行為において、他の同等のものの中で首位を占めるべきである」としています。

教会の宝ともいべき聖歌がこれからも典礼の中で歌い継がれていくことを願って、私たちは今後練習を続けていきたいと思えます。毎週火曜日の午前十時から、泡瀬教会で練習しています。一緒に歌い賛美を捧げましょう。(今井真由美)

熊本支援センター報告会

コザ教会

当教会主任のヨアキム神父様は、教区のカリタス担当司祭でもあります。

今年四月の、熊本・大分地震を受けて、カリタス福岡が熊本の菊池教会に設置した支援センターに、教区からの人的支援として、首里教会の新田氏が三ヶ月余り菊

テン語でいっしょに歌えたら、巡礼に行つたときにさらに大きな思い

池の支援センターに滞在していた経緯から、去る十二月十七日(土)、当教会で新田氏による報告会が行なわれました。まずはカリタスジャパンについての説明があり、熊本支援センターは閉じられたものの、カリタス福岡が支援を継続していること、日本においては東日本震災を受けて、今尚三つのカリタスベアスが東北で活動を継続していることなどが報告されました。

新田氏が菊池教会の支援センターにおられた間に、全国から三〇〇人を超えるボランティアの方々が支援センターを訪れたそうです。下は高校生から上は七十歳を超える方々まで、何か自分のできる支援があればとやって来たそうです。

活動は様々あって、瓦礫の分別や集積場への運び出し、避難所の清掃、ペットの散歩に農業支援、被災地を花で飾る運動や相談所等の場所が書かれたチラシの配布等、地域の社会福祉協議会からの様々な支援の要請に応じて、ボランティアさんの手配や送迎等の役割を担ってこられたそうです。「そこに困っている人がいて、私に差し伸べられる手があるからスーッと差し出した」、それが当たり前といった感覚で来られるボランティアさんたちに大きく教えられ、大変刺激になったと新田氏は

語っておられました。熊本に来られたボランティアさんたちの大半が、先年の広島水害や東日本大震災にもボランティアとして活動されていたそうです。

「困っている」と気負うことなく、「困ってお手伝いできる多くの人びとに出会い、善きサマリヤ人は決して夢物語ではなく、私たちの踏み出す小さな一歩が大きな助けとなることを氏は実感されたそうです。

カリタスのこうした活動が継続していけるように、私にもできるだけ様々な支援を考えていきたいと思えました。(大嶺幸子)

バイオリンリサイタル

与那原教会

新垣好美さんのバイオリンリサイタルが、去る十二月十九日、八重瀬町にある音楽堂であった。好美さんは、主日のミサで、バイオリンの伴奏を加え、典礼の祈りを豊かにしている。

リサイタルでは、木のぬくもりと香りがする小さなホールに、ルノアールとゴッホの絵を展示、ヨーロツパの雰囲気を出して目も楽しませた。進行係のピアノ調律士さんは、ユーモアを交えて、曲へ導入してくださった。

第一部はバッハの曲。三十分の曲は、アツという間に弾き終える。右手の弓のリードで左手の指たち



が上下に微妙な変化をつけながら、音を出している。その音色の変化が耳に心地よい。目をつぶってバッハの世界に入りこむ。曲の内容は知らないが、好美さんの一心に弾いている姿は愛らしく愛おしい。

二十分の休憩後の第二部は、ベートーベン。仲村渠悠子さんとのピアノとバイオリンの共演であった。第一部の雰囲気と異なり、あたかも天使たちが羽を大きく広げて喜びいっぱい、上へ下へ横へと踊っているような躍動感のある曲である。わたし一人だったら、立ち上がって踊っていたに違いない。窓から見える木の小枝の葉も、風に吹かれ、曲に合わせてゆれているように見えて楽しかった。バッハとベートーベンの曲に感謝の二時間であった。

(稲国政子)

サマーキャンプ50周年記念事業

黙想の家大改修工事への協力お願い

那覇教区長 ベラルド 押川 壽夫 司教

主の平和と喜び

新しい典礼年を迎え、教区の計画に思いを馳せるとこれまで大切に回を重ねて実施してきた「サマーキャンプ」が 50 回目を迎えることに気付かされます。

「サマーキャンプ」といえば皆さんご承知の通り、わが教区が総力を上げて取り組み、教区の未来を担う子供たちのために、多くの人の犠牲と忍耐、厳格と寛容、喜びと希望の協力を用いて神ご自身が培ってきた神との出会いの場、神からの恵みの場です。

しかし、その大切な教区行事の最適な開催場所として活用されてきた『黙想の家』は、老朽化により築 50 年を目前にして危険な状態になってきました。これまでも 30 年ほど前に防水等の外壁改修工事を行ってはいますが、潮風や暴風雨の影響を受けコンクリートの亀裂等が進み、現状のままでは安心して使える建物ではなくなってきたのです。とはいえ、この建物は先人たちが丹精こめて建設したため、いまだ十分に建物としての耐力度を保っており、改修によって十分使えることが調査によって分かりました。そこで、神との出会いの場である「サマーキャンプ」が 50 周年の節目を迎えるにあたり、その最適な開催場所である『黙想の家』をもう一度安心して使える建物とするために必要な大改修工事を記念事業の一環として実施したいと考えました。

そこで、去る 12 月の司祭・助祭会議で、主の御降誕祭から御復活祭までの期間、各小教区で特別献金箱を準備して募金し、この期間の募金額では不十分な場合は、特別献金日を定めてこの事業費 30,000,000 円を目標に教区を挙げて取り組むことを司祭団と共に決定しました。

つきましては、各小教区において本事業についての理解を深めつつ、事業参加の輪が隅々にまで行き渡りますようご協力と祈りを宜しくお願いいたします。

特別献金振込口座：沖縄銀行大道支店（121）普通預金 1918019
 宗教法人カトリック沖縄教区 代表役員 押川 壽夫



葬祭の
「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。お気軽にご相談ください。

那覇市首里烏堀町4-57-3
 TEL & FAX: 098-885-8205
<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>
 E-mail: yasurai@nirai.ne.jp

あらた たでお
 代表者・新田 選

24時間
 受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～
 そうてんしゃ

葬 典 社

- *創業30数余年・・・。
- *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
 (実務担当) 比嘉 高茂

24時間
 受付

てんごく
 ☎098-853-1059

